

アリストテレスにおける数的一性について

岩 田 圭 一

1 問題の所在

アリストテレスの形而上学的思考において中心的な役割を果たす「ウーシアー (*ousia*)」の概念は、『カテゴリー論』において「基体 (*hupokeimenon*)」という意味合いが強調される仕方で説明されているが⁽¹⁾、質料形相論を前提とする『自然学』や『形而上学』などではとりわけ「形相 (*eidos*)」や「本質 (*to ti ên einai*)」を表すのに「ウーシアー」が用いられるようになる。基体としての「ウーシアー」と形相ないし本質としての「ウーシアー」という二つの用法が区別されることは、テキストからして明らかなことであり、一般に認められていることである。興味深いのは、この区別にもかかわらず、アリストテレスがどちらの用法の「ウーシアー」も「或るこれ (*tode ti*)」(あるいは「この或るもの」と特徴づけていることである⁽²⁾。「或るこれ」には一定の意味合いがあり、アリストテレスは「ウーシアー」を説明するためにこの言い回しを用いる。近年、比較的優勢であるように思われる解釈は、「或るこれ」を「何であるか」とほぼ同じ意味合いで理解する解釈である⁽³⁾。この解釈では、「或るこれ」は「何であるか」の答えに相当するものを表し、或る種の規定性を示しているとされる。実際、カテゴリーの列挙に際して実体カテゴリーを示すのに「或るこれ」が用いられ、「何であるか」の言い換えとして用いられているテキストがある (*Met. Z 1, 1028a11-12*)。カテゴリーはそもそも述語づけにおける述語の部分に着目した分類であり、実体カテゴリーの例として挙げられる「人間」や「馬」もその限りで理解されていると考えられる。「何であるか」と問われて「人間である」と答えるような例が念頭に置かれている。

「或るこれ」が規定性を示すという理解は、形相ないし本質としての「ウーシアー」の説明としては好都合である。というのも形相ないし本質はそれが内在する当の結合体に対してその「何であるか」を与えるものだからである。また、「或るこれ」に関するこの理解は、基体としての「ウーシアー」を説明するのにも不都合とはならない。というのも、例えば白という属性の基体として人間があるとした場合、この基体は述語の部分にあるものではないが、「人間である」ものとして捉えられているからである。基体としての実体が、規定性として理解される「或るこれ」によって説明されることに不都合はないだろう。このように「或るこれ」を規定性として理解す

ることは、「ウーシアー」のどちらの用法にも不都合がなく、この理解で問題がないように見える。

しかし「或るこれ」の理解には、「これ (*tode*)」(あるいは「この」)という指示語の役割を強調する仕方もある。この場合の指示はもちろんそのつどの状況で定まるのであり、「これ」(あるいは「この」)は説明的な仕方でも用いられているが、それはともかくとして、この仕方の理解もテキストに基づいたものであり、一定の説得力のあるものである。この理解は、『カテゴリー論』における、究極的な基体である第一の実体についての以下の説明に基づいていると考えられる。

すべての実体は或るこれを意味するように思われる。それゆえ、第一の諸実体の場合、それらが或るこれを意味することは議論の余地がないことであり、真である。なぜなら、明示されているものは不可分なもの (*atomon*) [個別的なもの]、数において一つのもの (*hen arithmōi*) であるからである。(Cat. 5, 3b10-13) ([] は筆者による補足)

『カテゴリー論』では第一の実体(個別的な実体)と第二の実体(普遍的な実体)が区別されており、この引用の最初にある「すべての実体」は第一の実体と第二の実体のすべてを意味していることになる。この引用で、第一の実体が疑いなく或るこれであることが説明され、ここでは示していない後の部分(Cat. 5, 3b13-18)で、第二の実体については或るこれであるように見えるが、第一の実体との関係で言えば実は或るこれではないということが示される。しかし実体カテゴリーがそもそも或るこれとして説明されることを考えれば、第二の実体を或るこれとみなすことは不可能ではない。先に見た、規定性の理解においては、第二の実体は明らかに或るこれである。したがって、この引用の最初の、「すべての実体は或るこれを意味するように思われる」という文は、この引用の後で第一の実体との関係で第二の実体の或るこれ性が否定されるとしても、間違ったことを言っているわけではないことになる。

しかしながら、上の引用箇所から始まる文脈においては、或るこれであることは第一の実体にあてはまり、第二の実体にはあてはまらないとされているので、その「或るこれ」は規定性を示すのとは異なる用法であると考えるのが自然である。ここでは、第一の実体が或るこれを意味するのはそれが一個のものだからであるということが言われており、「或るこれ」における対象指示の役割が考えられているように思われる。とくに、「数において一つのもの」という説明が重要である。「不可分なもの」のほうは、この語の用法において「個別的なもの」という意味があるにしても、その語自体の意味合いからすれば、その語は単純に「不可分なもの」を意味するのであって、『カテゴリー論』における類種構造の理解からすれば、類を種に分割し、種を個物に分割して、そこで止まるという構造が示されているにすぎないとも考えることもできる。この場合、「不可分なもの」が具体的で個別的な一個のものであると言えるかどうか問題である。アリストテレスは単に、言論の上で類を種に、種を個物に分割しただけであって、そこで見出された個物

が具体的で個別的な一個のものであることまで示しているわけではないと考えることもできるからである⁽⁴⁾。しかしアリストテレスは「不可分なもの」のすぐ後で、「数において一つのもの」という説明を加えている。「数において一つのもの」が言論上での「不可分なもの」と同じ意味のものであるとすれば、ここで何か具体的なものが考えられていることにはならないが、「数において一つのもの」が言論上での「不可分なもの」とは異なる意味を付け加えているとすれば、ここで具体的で個別的な一個のものが問題にされていることを読み取ることが可能になってくる。

「不可分なもの」が言論上の不可分なものであるのか、あるいは具体的で個別的なものであるのかについて、この部分だけでどちらが正しいかを言うことは難しい。言論上の不可分なものと同様に考えるなら、「数において一つのもの」をそれと同じ意味にとる必要が出てくるが、ともかく、「不可分なもの」の意味をあらかじめ定めることが難しいので、その意味については未決定としておいて、「数において一つのもの」のほうから考えていくことにする。そもそもこの文脈では、「或るこれ」は規定性ではない仕方では捉えられる必要がある。先ほど説明したように、第二の実体について或るこれ性が否定されることになるからである。「或るこれ」を規定性ではない仕方では捉えるにあたって、「数において一つのもの」という特徴づけは重要である。というのも、「数において一つのもの」は『形而上学』Δ巻第6章において、そのものの質料が一つのものと説明されているからである (*Met.* Δ 6, 1016b32-33)。質料が問題にされるものは単に言論上のものではなく、具体的で個別的な一個のものであると考えられる。数的に一つであることはΔ巻第6章における自体的な一性の説明の中で言及されているが、数的一性の説明そのものは質料の一性によるのみであり、質料の一性が本当に具体的で個別的なものを表しているのかどうか、テキストに即して確認する必要がある。その章における自体的な一性の説明は質料的なものについての説明で始まっているが、連続性による説明と種（種類）に着目した説明があり、その章の終わりのほうで触れられる数的一性とのつながりをどのように理解するべきかが問題になりうる。本稿では、Δ巻第6章における自体的な一性のテキストのうち、質料的なものが問題にされる箇所を取り上げ、当該テキストの理解を明確にすることによって、アリストテレスにおける数的一性の意味を明らかにし、それを通じて、個別的な実体に適用される「或るこれ」の意味を理解することにした。

2 「或るこれ」と数的一性

『形而上学』Δ巻第6章における自体的な一性のテキストを見る前に、「或るこれ」と数的一性とのつながりについてもう少し考えておくことにする。先ほど『カテゴリー論』の一節を見た際に、第二の実体が第一の実体との関係では或るこれとはみなされないことに言及した。第二の実体は第一の実体との関係では「或る〈このような〉もの (*poion ti*)」と説明されるのであるが (*Cat.* 5, 3b15-16)、アリストテレスもその後で述べているように、これはいわゆる性質とは異なる意味

の〈このような〉ものである (b18-21)。第一の実体に適用される「或るこれ」が数的一性によって説明される『カテゴリー論』の一節と関連する箇所として、『形而上学』B巻の以下の一節を挙げることができる。

それら〔諸原理〕が普遍的であるのか、あるいはわれわれが個別的なもの (*ta kath' hekasta*) と言うような仕方においてあるのかということも〔問題にしなければならない〕。というのは、もしそれらが普遍的であるなら、それらはウーシアーではないことになるだろうからである (というのも、諸々の共通なものいかなるものも或るこれを示すのではなく、〈このような〉もの (*toionde*) を示すのであるが、実体は或るこれであるからである。そしてもし共通に述語づけられるものが或るこれであり一つであると仮定されるのなら、ソクラテスが多く動物であることになるだろう。すなわち、彼自身であり、人間であり、動物であることになるだろう。それぞれのものが或るこれすなわち一つのを示すのだとすれば)。(Met. B 6, 1003a6-12)

『形而上学』A巻第1-2章において、知恵としての学(第一の哲学)が第一の諸原理についての探究であることが示されるが、B巻ではこの探究のための諸問題の列挙が行われる。この引用では、諸原理は普遍的なものか個別的なものかという問題が示されている。第一の哲学の探究においては最終的には、個別的な実体に内在する個別的な形相ないし本質が原理として見出されることになるので、上の引用における一つ目の「ウーシアー」を、『カテゴリー論』に見られるような「実体」と解することは難しいように思われる。しかし、最終的に見出される形相ないし本質も個別的である点では、いわゆる実体と通じる性格をもっていると言うこともできる。実際、アリストテレスは上の引用において、諸原理が普遍的なものであるなら諸原理はウーシアーではないということを説明するにあたって、いわゆる実体にあてはまる説明を持ち出している。上の引用における括弧内の説明がそれである。その括弧内の説明は、そこに挙げられている例からも明らかなように、『カテゴリー論』に見られる述語づけの理論を前提にしており、本稿の第1節で取り上げた『カテゴリー論』の引用箇所と内容的につながっている。

諸々の共通なものが或るこれではなく〈このような〉ものであるという説明は、第二の実体は第一の実体との関係では或るこれではなく〈このような〉ものであるという先に見た説明と同じものと言える。この引用では、『カテゴリー論』からの先の引用とは異なり、第一の実体が或るこれであることについての直接的な説明——数的一性による説明——は行われていない。その代わりに、普遍的な実体が或るこれであると仮定した場合、不都合な帰結が生じることが示されている。その仮定は、「もし共通に述語づけられるものが或るこれであり一つであると仮定されるのなら (*ei d' estai tode ti kai hen thesthai to koinêi katêgoroumenon*)」という仕方で行われている。

るが、或るこれであることと一つであることが並べられていることに注意を向ける必要がある。『カテゴリー論』からの先の引用において、第一の実体が或るこれであることはそれが数的に一つであることによって説明されていた。これを踏まえれば、この仮定において、或るこれであることと（数的に）一つであることが並べられていることは納得のいくことであると考えられる。ただし、この仮定部分のテキストは校訂者の推測によって「一つ」という読み方が可能になっており⁽⁵⁾、その点に問題を見出す解釈者もいる⁽⁶⁾。しかし『カテゴリー論』からの引用とのつながりを考えることによって、校訂者の推測を自然なものとし、みなすことができるように思われる⁽⁷⁾。その箇所に問題を見出す解釈者は写本どおりに、「もし共通に述語づけられるものが或るこれであり、立てられうるのなら (*ei d' estai tode ti kai ekthesthai to koinêi katêgoroumenon*)」と理解する。これは、例えば普遍的な人間がアリストテレスにおいては多くの個物に述語づけられるものとして存在するが、そのような人間を個々の人間とは別のもの（アイデア）としてあたかも別の個物のように立てることが仮定されている、という理解である。この理解の内容には問題がないように思われる。実際のところ、校訂者が「一つ」という読み方をする場合も同様のことが意味されていると考えられる⁽⁸⁾。というのも、アイデアとしての人間を個々の人間とは別の一個のものとして立てる場合に不都合が生じることになるからである。

この仮定部分についてテキストを修正するにせよ写本どおりにとるにせよ、内容の理解に大きな違いはないと考えられるので、ここではさしあたり Ross の校訂に従うことにする。テキストの校訂の問題はともかくとして、その仮定の帰結も見っておかなければならない。その仮定のもとでは、ソクラテスが多くの動物、すなわち、ソクラテス自身、人間、動物という三つのものになる、という帰結が生じるとされる。ソクラテスは人間でも動物でもあるのだから、この帰結のどこが不都合なのかという疑問が生じるかもしれない。しかし、ソクラテスは人間でも動物でもあるのだから不都合はないように見えるという場合、われわれはすでに「人間」と「動物」をアリストテレス的に、すなわち、個々の人間に述語づけられる種や類として理解している。ここに示されている仮定は、人間や動物をプラトンの——もちろんアリストテレスが理解する限りでのプラトンの——意味であるが——理解することを要求する。この場合、人間はソクラテスとは別の一個のものであり、動物もそうであり、人間と動物とを比べてみても、後者のほうがより上位の一個のものであることになる。人間や動物を或るこれとみなすこと、すなわち、それぞれアイデアとして独立に存在するものとみなすことは、ソクラテスという本来一つであるはずのものを、当のソクラテス自身でもあり、これとは別のものとしての人間でもあり、またこれらとは別のものとしての動物でもあることにしてしまうのである。これは不合理な帰結であるので、人間や動物といった普遍的な実体を或るこれとみなすことは誤った仮定であることになる。

ここで言われている「或るこれ」は明らかに、個別的な実体には適用されるが普遍的な実体には適用されないものである。先に見たように、「或るこれ」を規定性として理解した場合、「或る

これ」は個別的な実体にも普遍的な実体にも適用することが可能である。しかし、『カテゴリー論』からの先の引用 (*Cat.* 5, 3b10-13) に見られるような、数的一性によって説明される「或るこれ」は、個別的な実体にはあてはまって、普遍的な実体にはあてはまらないものであった。B巻のこの一節における「或るこれ」は、人間や動物にはあてはまらないものとされているので、数的一性によって説明される「或るこれ」であることは明らかである。『カテゴリー論』だけでなく『形而上学』のテキストにおいても、普遍的な実体には適用されないが個別的な実体には適用される「或るこれ」が見られ、これが数的一性との関連で用いられていることが確認された。次に、数的一性の意味を理解するために、Δ巻第6章における自体的な一性に関するテキストに向かうことにする。

3 質料的なものの自体的な一性

アリストテレスはΔ巻第6章において、自体的に一つ (*kath' heauta hen*) と言われるものとして、(1) 連続的 (*sunechê*) であるもの、(2) その基体が種 (種類) において (*tôi eidei*) 異なっていないもの、(3) 種差の基体としての類が一つであるもの、(4) その本質を言い表す説明規定 (*ho logos ho to ti ên einai legôn*) が一つであるもの、という四つのもを挙げている (*Met.* Δ 6, 1015b36-1016b6)。そしてこれに続けて、属性 (ないし属性をもつもの) がその基体との関係において一つと言われることと、諸事物が第一義的に一つと言われるのはそれらのウーシアーが一つであるときであるということが付け加えられる (1016b6-11)。その際、ウーシアーが一つであるのは連続性においてか、種 (種類) において (*eidei*) か、説明規定においてであるかであると説明されている (b8-9)。さらにまた、連続的なものは一つと言われることもあれば、一つと言われないこともあるが、一つと言われない場合、形相がないために或る全体的なもの (*ti holon*) ではないから一つと言われないということが説明される (b11-17)。そしてさらに、単位や尺度としての一について説明が行われ、事柄によって四分音が一であったり母音や子音が一であったりすることが示される (b17-31)。こうしたさまざまな観点からの説明があった後で、「数において一つ」、「種において一つ」、「類において一つ」、「類比において一つ」という四つの区分が提示されている (1016b31-1017a3)。そして最後に、一と対立する多なるものとして、連続的でないもの、種 (種類) において分割されうる質料をもっているもの、本質を言い表す説明規定を一つより多くもっているものという三つのもが挙げられている (a3-6)。

以上がΔ巻第6章の概要であるが、これを見てわかるとおり、いわゆる哲学用語辞典としてのΔ巻のテキストにしては込み入っているという印象を受ける。「種において一つ」は、例えばソクラテスやカリ阿斯といった個々の人間がすべて人間であるという例を考えれば簡単に理解できる。しかし、ここで「種 (種類) において」という訳し方で示している言い回し——原語は「種において」と同じである——は、質料的なものに関して言われているものであり、個々の人間が

種的に一つというのとは異なる仕方での種（種類）的一性が問題にされている。また、「その本質を言い表す説明規定が一つであるもの」は、種において一つであるものも、類において一つであるものも含んでいると考えられる。また、「数において一つ」と言われるものはその質料が一つのものであると説明されるが（1016b32-33）、Δ巻第6章では、質料が一つであることは連続性において一つであることとしても（1015b36-1016a17）、種（種類）において一つであることとしても（a17-24）説明されている。数的一性を説明する質料の一性はどちらの意味で理解されるべきであるかが問題となる。また、「ウーシアーが一つである」ことについて、三つの観点から説明されているが、とくに連続性における一性は質料に関して言われているのであり、この箇所「ウーシアー」の曖昧さも問題になるだろう。Δ巻第6章における自体的な一性に関するテキストは、論述の各部分の関係を理解することが難しいテキストであると言える。本稿では、この章のテキストの構造を明らかにすることではなく、数的一性の意味を理解することを目的としているので、質料的なものについて言われる一性の説明に焦点をあてることにする。

まず、自体的な一性の最初の用法として挙げられている、連続性による一性の説明を見ることにする。連続的なものの例として、「結ぶものによる束」、「接着するものによる木材」、「線」が挙げられており（1016a1-2）、質料的なものが考えられていることは明らかである。線の場合、数学的対象として見るなら、その質料は思惟的な（*noëtê*）質料であって（cf. Z 10, 1036a9-12）、束や木材のような感覚的な質料ではないことになる。曲げられた線への言及があるが（1016a2）、身体的部分（脚や腕など）との類比（a3）からもわかるように、線上での運動を想定した場合に運動の方向が変わるような曲がり方すなわち折れ曲がった状態の線が考えられている。アリストテレスはこの類比への言及から、自然において連続的なものと技術において連続的なものとを区別することに話を移し、前者のほうがより一つであることを説明している（a4）。その際に、運動が自体的に一つである場合にそのものは連続的なものと言われると説明されており（a5）、アリストテレスが身体的部分の例として挙げている脚や腕の動きが念頭に置かれていることが理解される。また、折れ曲がっている連続的なものと折れ曲がっていない連続的なものとは、後者のほうがより一つであると言われている（a9-11）。このような連続的なものに対して、連続的ではないものとして挙げられるのは接触によって一つであるものである（a7-9）。最初に挙げられていた例から考えると、結ばれないでただ寄せ集められているだけの複数の枝など、あるいは、接着されないで積み重ねられているだけの木材などが連続的ではないものということになるだろう。

次に挙げられるのは、その基体が種（種類）において異なっていないことによって自体的に一つと言われる用法である。その説明は以下のとおりである。

〔種（種類）において〕異なっていないものとは、その種（種類）が感覚において区別さ

れえないもの (*hôn adiaireton to eidos kata tèn aisthêsin*) のことである。そして基体は終極 (*to telos*) との関係において第一のもの (*to prôton*) か、あるいは最後のもの (*to teleutaion*) である。というのもブドウ酒や水は、種 (種類) において [種 (種類) が感覚において] 区別されえないものである限りにおいて一つと言われるからであり、また果実由来のすべての液体 (例えばオリーブ油やブドウ酒) や溶けるものは、すべてのものの基にある最後のもの (*pantôn to eschaton hupokeimenon*) が同じものであるので、一つと言われるからである。というのもこれら [果実由来の液体や溶けるもの] はすべて水あるいは空気⁽⁹⁾ であるからである。(Met. Δ 6, 1016a18-24)

その基体が種 (種類) において異なっていないものは、「その種 (種類) が感覚において区別されえないもの」と説明されている。感覚の対象になるものは個別的なものである。ただし、ここで挙げられている例は液体であり、いわゆる個別的な実体とは異なる。液体のようなものはいわゆる個別的な実体とは異なるものである。また、個別的な実体 (結合体) の構成要素としての限りにおける質料とも異なるように思われる。このようなものを仮に質料的なものと呼ぶことにする。ブドウ酒と水は味覚や視覚などの感覚によって区別されうるが、例えば二つのグラスに入った液体が感覚によって区別されないとき、どちらもブドウ酒であるといったように、その種 (種類) が区別されない限りにおいて、それら二つのグラスに入った液体は自体的に一つであると言われる。これはグラスで分けている限りにおいては、ソクラテスとカリアスが種において一つである場合と類似している。しかしアリストテレスがグラスで分けた状態を想定しているとは限らないし、また、そもそも液体は個別的な実体とは異なる質料的なものであるので、液体に適用される種 (種類) において一つという一性をいわゆる種的な一性と同じであるとは考えないほうがよいだろう。ともかくここでアリストテレスは、感覚によって区別されない質料的なものが自体的に一つであることを明らかにしている。

上の引用では、さらに異なる観点も考慮されている。それはより元素的な次元で質料を捉える観点である。この観点に立つ場合、ブドウ酒と水は自体的に一つであることになる。この場合も感覚において区別されえないものが問題になっているはずであるが、ブドウ酒と水が区別されないような次元で感覚が使用されると考えればよいだろう。ブドウ酒と水を区別する際には味覚が重要な役割を果たすが、それらの元素として共通の水を見出す場合は、味覚は決定的な役割を果たすわけではなく、むしろ触覚が重要になってくると考えられる。実際、元素として共通の水があるようなものと、元素として共通の土があるようなものとは、触覚によって区別されるだろう。ただ、元素的なものを捉えるには、四元素に関する知識も必要になってくると思われる。おそらくそうした知識も前提としながら元素的な水が見出されるのだと考えられる。いずれにせよ、この観点も種 (種類) において一つという用法に含まれているので、元素的な次元で見た場合の種

(種類)的一性が示されていることになる。こうして、質料的なものに関して、種(種類)的一性として二つの見方が認められていることがはっきりしてくる。

では、数において一つであることの説明として示される、質料が一つであることは、以上のどの用法を前提にしたものであるのだろうか。本稿の第1節で示したように、ここで問題にしている数的に一つのものとして想定しているのは第一の実体である。液体のような質料的なものの場合で示される一性は、ここでの数的一性とは異なるように思われる⁽¹⁰⁾。仮に、第一の実体に適用される数的一性——その質料が一つであることによって説明される——が、質料的なものに適用される種(種類)的一性によって説明されるのだとすれば、「数において一つ」が〔その質料が〕種(種類)において一つ〕によって説明されることになるが、それは「数において」と「種において」という用語法の混乱を示していることになり、よい解釈とは言えないだろう。こうして、第一の実体に適用される数的一性は、連続性による一性によって説明されると考えるのがよいことになる。

質料的なものが連続的であるような仕方一つであるものは、接触によって一つであるものとは異なる。接触とは異なる仕方一つであることにはいくつかの種類があった。最初に挙げられていたのは結ぶとか接着するという仕方であった。その次に線が挙げられ、運動の観点も導入され、また、自然において連続的なものと技術において連続的なものとが区別されていた。第一の実体に適用される数的一性を考える必要があるのだが、例えば第一の実体の例として一個の机を考えると、これは、その質料が接触とは異なる接着など何らかの仕方連続的であるようなものである。また、一個の人間を例として考えると、その身体の一性は接着などよりも自然な仕方一つになっていることがわかる。人間の身体は自然において連続的なものと言えるが、そもそも自然においてあるものとはそのうちに運動の原理をもつものことである (cf. *Ph.* II 1, 192b13-15)。身体に魂という形相がそなわり、これが原理としてあるおかげで身体はさまざまな運動を行うことができる。ただ、 Δ 巻第6章では脚や腕が挙げられていることからわかるように、比較的単純な運動が念頭に置かれている。身体の全体の動きとなると、例えば立ち上がるという運動は全体として見れば一つの運動と言えるかもしれないが、身体の各部に注目すると、或る部分は動きを止め、或る部分は動き出し、といった具合に、動きが止まる部分や動き出す部分があることになり、そうした細部に注目する限りでは立ち上がるということが一つの運動とは言えなくなるように思われる。人間の身体のようなものに関しては、やはりその質料が一つであるということを行うには、その運動が一つであるからという説明は必ずしも適切ではなくなると考えられる。身体のような複雑な質料的構成をしているものに関しては、そこに形相が含まれることによって一つの全体的なものが存在しているという仕方説明したほうがよりよいと言えるだろう。アリストテレスは Δ 巻第6章において、本節の最初のほうで触れたように、自体的な一性についての四つの区別とは別枠で、形相がそなわっておらず或る全体的なものになっていないものは一

つと言われぬという用法にも言及している。身体については、この用法から説明したほうがよりよいと考えられる。形相としての魂が身体各部を統制することで身体は一つのものとなっている。このように、人間のような個別的な実体については質料の側面のみで一つと言うことは難しいと考えられるが、机のような個別的な実体については、運動しないものであるため、質料の側面からだけでも、すなわち、接着などによって質料が連続的なものとなっているということによって、机の数的一性を理解することが可能である。ただし、人間など生命のある個別的な実体との類比において、机のような人工物も形相をもつ全体的なものとなされる。アリストテレスの質料形相論では、机は質料と形相からなるものとなされるので、形相の側面からも机を一つとみなすこともできる。

このように、第一の実体に適用される数的一性は結局のところ、質料の連続性のみによって説明することは難しいということが明らかになり、一性の原因となる形相を考慮に入れる必要があることが明らかになった。問題は、「或るこれ」が数的一性によって説明されているテキストが『カテゴリー論』という論理的著作だということである。論理的著作には質料形相論は見られない。質料形相論のない文脈で登場する数的一性を質料形相論によって説明することには問題があるように思われる。これはたしかにそのとおりであるが、『カテゴリー論』第8章や第11章などで、属性の基体として身体と魂とが区別されていることが見出される。また『カテゴリー論』第2章では、属性がそのうちにあるところの基体の例として魂と物体（身体）が挙げられている。アリストテレスは属性の基体として個別的な実体を考えているが、属性の種類に注意が向けられる場合、例えば白とか健康といった属性であれば物体ないし身体のうちであり、文法知識とか正義といった属性であれば魂のうちにあると考えている。これは、属性との関係において個別的な実体の質料的な側面と形相的な側面が区別されていることを示している。このことを踏まえれば、『カテゴリー論』という論理的著作において言及される数的一性を理解するにあたって、質料が一つだからということを持ち出すことは必ずしも的外れなことではないと言えるだろう。『カテゴリー論』においても、個別的な人間が身体をもったものであることは前提となっており、そのような身体が連続的なものであることによって数的に一つの間があると考えられていると理解することは可能である。ただし、身体の連続性を説明するために必要とされる魂についての理解、すなわち、身体を統制する形相としての魂という理解は、質料形相論のない『カテゴリー論』ではまだ明瞭になっていない。個別的な人間の質料と形相についての明瞭な理解はまだなかったかもしれないが、身体をさまざまな属性の基体と理解していた点において、個別的な人間の身体は連続的なものと理解されていたと考えてよいだろう。個別的な人間の身体の連続性を前提とする数的一性は、具体的で個別的な人間の存在を示していると言える。こうして、数的一性によって説明される「或るこれ」によって特徴づけられる第一の実体は、類種構造の分割の最下に位置するだけの言論上のものではなく、現実の世界に根を張ったものであるとすることができるだろう。

注

- (1) 『カテゴリー論』第5章における「ウーシアー（実体）」に関する論述がそうである。筆者はギリシャ哲学セミナー第25回共同研究セミナー（2022年9月11日、桜美林大学）において、「アリストテレスにおけるウーシアーの優位性について」という題目の発表を行い、基体という意味合いの重要性を確認した上で実体の優位性について考察し、第一の実体の含蓄を自体的な述語づけの点から明らかにすることを試みた。その発表原稿では紙幅の都合上、「実体」の重要な特徴である「或るこれ」について考察することができなかった。本稿ではその特徴づけに焦点をあてて考察を行う。
- (2) この言い回しの解釈の仕方はいくつかあるが、大まかに見れば、これから本文で示す二つの仕方——規定性と解する仕方と指示の役割を強調する仕方——がある。この言い回しについての解釈の仕方については、Phil Corkum, 'This', *Ancient Philosophy Today: DIALOGOI* 1. 1, 2019, pp. 38-63 の説明を参照 (pp. 38-39)。Corkum は記述と直接的な指示との違いに注意を向け、*tode ti* が個別的な実体（あるいは個別的な形相ないし本質）の直接的な指示のための表現であることを明らかにしている (pp. 49-50)。
- (3) 「或るこれ」の用法を整理した上で規定性の意味合いの重要性に注意を向けているものとして、David Bostock, *Aristotle, Metaphysics Books Z and H, Translated with a Commentary*, Oxford: Clarendon Press, 1994, pp. 83-84 の説明がある。新版アリストテレス全集の『カテゴリー論』（中畑正志訳『カテゴリー論』、『アリストテレス全集1』所収、岩波書店、2013年）の補注でも、規定性の意味で理解する説明が行われている (pp. 98-99)。
- (4) ここで具体的に個別的な一個のものと言っているのは、われわれが感覚を用いて捉えることのできる対象のことである。これと対比される言論上のものとしては、例えば『形而上学』Z巻第4-6章における本質をもつ個物（本質と同一視される個物）を挙げるができる。言論上の個物は個別的ではあるが具体的なものとは言えない。というのもそのような個物は質料も付帯的な属性も捨象されて理解されているものだからである。そのようなものはもはや個物ではなく普遍的なもの（形相や種など）ではないかという疑問も生じうるが、Z巻第4章のはじめに示されている君という例を軽視しない限りにおいて、あくまでも個物が問題にされていると考えることができる。これについては拙著『アリストテレスの存在論——〈実体〉とは何か』（早稲田大学出版部、2015年）の第3章を参照。
- (5) 本文に示している訳は W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, I, Oxford: Clarendon Press, 1924, ad loc. のテキストに基づいている。Bekker 版に示されている写本どおりのテキストは '*ei d' estai tode ti kai ekthesthai to koinēi katēgoroumenon*' であるが、Ross は、'*estai*' が異なる二つの役割を担うことになる（「或るこれである」の「である」と、「立てられうる」の「うる」）のが問題であるとして、'*ekthesthai*' を '*hen thesthai*' と修正する解釈を採用している (p. 250)。この修正によって、'*tode ti kai hen*' を '*thesthai*' とのつながりで理解し、'*estai*' を '*thesthai*' とのつながりで読むことができる。ちなみに Werner Jaeger, *Aristotelis Metaphysica*, Oxford: Clarendon Press, 1957, ad loc. は '*ekthesthai*' を保持し、その前に '*dei*' を補っている。
- (6) Michel Crubellier and André Laks, eds., *Aristotle: Metaphysics Beta: Symposium Aristotelicum*, Oxford: Oxford University Press, 2009 所収の Stephen Menn の担当箇所 (*Aporiai* 13-14) の論考において、彼は '*tode ti*' と '*ekthesis*' の用法をさまざまなテキストにあたって明確にし、これによって写本どおりの読みがよいことを提案している (pp. 221-233)。
- (7) B巻第6章からの引用の最後に、「それぞれのものが或るこれすなわち一つのもをを示すのだとすれば」と言われており、これも Ross (1924) の校訂を支えるように思われる。Cf. Menn (2009), p. 227.
- (8) 写本どおりの読み方を提案する Menn (2009) も、Ross (1924) の校訂に従ったとしても、この箇所で行われている内容に変わりはないと考えている。
- (9) Ross (1924), p. 302 の注釈にもあるとおり、ここで空気に言及されていることは問題である。『気象論』において、油は水と空気を要素としてもつとされている (*Meteor.* IV 7, 384a14-16, IV 10, 388a31-32)。ブドウ酒と

溶けるものは空気を含まないと考えられる。「水あるいは空気である」という部分を、「水あるいは水と空気である」と修正すれば、『気象論』における説明と合うことになる。ただし、『気象論』第4巻第7章のはじめのほうの論述を見ると、オリーブ油が空気のみからなっているようにも読み取れる。この論述からすれば、「水あるいは空気である」という説明で問題ないことになる。

- (10) 第一の実体は、或る特定の人間といった例からもわかるとおり、典型的には個別の実体である。ただし、『カテゴリー論』第7章における「関係的なもの」に関する論述の中に、頭や手に関して第一の実体と第二の実体との区別が行われているように見える箇所がある（*Cat.* 7, 8a13-28）。これらは個別の実体の身体的部分であるが、仮にこれらも実体として認めるとしても、やはり液体のようなものとは明確に異なる。個別の実体もその身体的部分も、液体と比べて相当に複雑な質料的な構成をしている。

本稿は科学研究費補助金基盤研究（C）による研究成果の一部である。